

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25244016

研究課題名(和文) ユダヤ学史と原典資料の複合研究 政治的・宗教的制約のない研究基盤の確立にむけて

研究課題名(英文) Researches in the history of Jewish Studies and its relationships to the "original sources" -- Towards the non-political and non-religious foundation of Jewish Studies

研究代表者

勝又 直也 (Naoya, Katsumata)

京都大学・人間・環境学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：10378820

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 31,600,000円

研究成果の概要(和文)：我々は、現在進行中のユダヤ学史の批判的再検討のを引き継ぎつつ徹底化し、現在の研究基盤にある「原典資料」の編纂というプロセスにまで至らしめた。現在、研究にあたって用いられる「学術校訂版」は、実のところ、写本の水準におけるテキストの連続性を解体し、その都度のパラダイムに従って再編成したものであり、これに基づく限り、前提された解釈の限界を超えることはない。実のところ、ユダヤ学のみならず、律法解釈の現場にあっても「原典資料」は絶えずアド・ホックに再構成されてきた。この点を踏まえ、その都度「原典資料」として参照されたもの一群の文献をこそ今後の研究の基盤とするべきだ、という点が、我々の研究の結論である。

研究成果の概要(英文)：We have proceeded in ongoing critical studies in the history of Jewish Studies, and analyzed editing process of "original sources" in terms of foundation for researchers. "Critical editions", which we use to refer uncritically, had reconstructed the "original sources" in accordance with paradigms of the time, whereas it had often demolished the consistency of texts within manuscripts. In so far as we would rely upon such "critical editions", hardly we could deal with texts themselves beyond the boundaries set by those paradigms. Furthermore, reconstructing the "original sources" for ad hoc purposes was a common practice of Jews even before the advent of Jewish Studies. In this regard, we have concluded that the "original sources" in terms of foundation for researchers should not mean the "critical editions" construed by academic endeavors, but a group of texts which had been considered as "original" in certain circumstances and contexts.

研究分野：中世ヘブライ文学

キーワード：ユダヤ学 学説史 研究史 史料編纂 文献学 写本研究 多国籍 国際研究者交流

1. 研究開始当初の背景

(1) 海外の研究状況

ユダヤ学の営みが、それ自身ユダヤ学の対象となってきたことは、近年のユダヤ学が過渡期を迎えつつあることの証左だろう。1990年代頃から始まった、シオニスト史学に対する批判的な研究は、ユダヤ人の歴史や文化を周辺社会から隔絶した閉鎖系の中で捉える、20世紀のユダヤ学の営みに対する総体的な批判にまで発展しつつあった。

こうした批判は、しかし現在のユダヤ学の中心たる欧米・イスラエルにおいては、一定の限界を持つ。「ユダヤ人」の歴史的同一性の中核に触れる革新的な研究は、信徒集団としてであれ、エスニックないしナショナル・グループとしてであれ、欧米・ヨーロッパに現に存するユダヤ社会との間に深刻な摩擦を引き起こす。新しいユダヤ像を提示する先端的な研究ほど、「反ユダヤ主義」「親シオニズム」「世俗主義」といったレッテルをめぐり白熱した論争に巻き込まれ、その真価が十分に検証されない傾向にあることは、否定できない。

現存するユダヤ社会から一定の距離を保ちつつ、あくまで学問的にユダヤ文化を研究するための新しい基盤の確立は、国際的な研究環境において喫緊の課題であった。

(2) 国内の研究状況

日本国内におけるユダヤ文化の研究の多くは、従来、聖書学・キリスト教学的な関心によるものか、或いはホロコーストや民族浄化をめぐる社会哲学的関心によるものであった。ユダヤ文化研究の中核をなす、後期古代から初期近代までの膨大な文献群は、結果として軽視されてきた。

しかし、近年では、欧米・イスラエルに留学して本格的なユダヤ学を吸収し、ユダヤ文化そのものを主たる対象として研究に取り組む若手の数が増し、国内のユダヤ文化研究の環境も大きく変わりつつある。新しく育ってきたこれらの人的資源を活用し、日本の人文学に斬新な視点を導入することは、ユダヤ学者としても、一人の人文学者としても、期待されることであった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、主として(1)海外におけるユダヤ学史研究の継承・徹底化、(2)ユダヤ学の基盤としての「原典資料」の概念の刷新である。

(1) ユダヤ学史研究の継承・徹底化

従来のユダヤ学史の研究は、個別的な学者や学派のイデオロギー批判の領域にとどまっていた。これを学問方法論の水準にまで徹底させ、個別的な対象の批判を超えていくことが必要であった。既存の学史研究は、そ

れまで積み重ねられてきた学問の成果をいったん宙づりにし、その政治的・宗教的な諸傾向を暴露することには成功したものの、その批判の先にあるべき新しいユダヤ文化研究の基礎を確立するには至っていない。ここで問題になるのが、「原典資料」とユダヤ学の営みとの関係である。

(2) 「原典資料」の概念の刷新

長期にわたり、隔たった地域において、様々な言語でその足跡を刻んできたユダヤ文化の研究にとって、それが基づくべき「原典」の姿は、実のところ不確かである。一冊の本にも様々な版があり、翻訳があり、注釈がある。200年に及ぼうという研究の営みの中で、ユダヤ学はこれらを文献学的に批判し、そのことで自らの立脚点たる「原典」を、学術校訂版として再編集し続けてきた。

従来 of 学史研究に欠けていた観点は、こうした「原典」の編纂過程への配慮である。時代・地域・言語のいずれにおいても、ユダヤ学の取り扱う文献は雑多である。ゆえに、ユダヤ学の営みは、それ自身がよって立つ基盤をあらかじめ規定しなければならなかった。「ユダヤとは何か」という問いに対する答えは、史料編纂の時点で一定程度先取されてしまう。ユダヤ学の営みに避けがたく付きまとうトートロジーに、我々はいかに向き合うことができるのかを考究する必要があった。

3. 研究の方法

上述の研究目的に即して、本研究は(1)ユダヤ学の核専門領域における研究史の再検討、および(2)そこにおける原典資料の編纂過程に焦点を絞った研究活動を行うこととした。

(1) 専門領域における研究史の再検討

従来、包括的なユダヤ史研究に過度の重心が置かれてきたユダヤ学史研究を、我々は個別的な専門領域において、より細やかに展開することを企図した。むしろ、ユダヤ学が取り扱う専門領域は多岐にわたるため、全面的なユダヤ学史研究を行うには至らないが、タルグムやミシュナといった古代のユダヤ教文献、俗に黄金時代といわれるムスリム統治下のイベリア半島でのユダヤ文学、中世から近代までの神秘主義や哲学等の高度に思弁的な思想書に至るまで、ユダヤ学の主たる領域に専門研究者を配置し、それぞれの専門性を生かした学史研究を行うことを試みた。

ここでの重心は、ユダヤ学史上の名だたる研究者たちが提示したユダヤ文化の像の析出と比較にある。個々の専門領域において提示された多彩なユダヤ像は、必ずしも指導的な歴史家や学派の描くユダヤ像には還元されえない。研究の営みが提示可能なユダヤ像の多様性に触れたうえで、それらに共通する方法論上の問題点にまで考察を深めること

が目論まれた。

(2) 原典資料の編纂過程

(1)における専門的な研究史の検討に基づいたうえで、我々は学史上の諸言説が典拠とする資料の問題に重心を移してゆくことを計画した。「ユダヤ学」が、まずは古典文献学の一分支として提起されたことからわかるように、ユダヤ学の展開は、それが基づく「原典資料」の編纂過程と相即不離の関係にある。ユダヤ学史を彩る学説の多様性は、ユダヤ学がその典拠としてきた「原典資料」の在り方の多様性を反映したものである。

研究上の習慣として、我々は最新の学術校訂版に依拠して研究を進めているが、ここでは、こうした無批判な習慣を一度留保し、諸種の「原典資料」が編まれることによる学説の変化に着目したい。新資料の発見、あるいは従来軽視されてきた文献の再編集によって、提示される「ユダヤ」の姿は大きく変わってゆく。個々の学説の正誤についての判断を一度留保するならば、我々の前に広がるのは、「原典資料」それ自体のありようの多様性である。ユダヤ学史の中でさえ、決して固定的なものではない「原典資料」のありようを前に、研究の基盤としての文献概念を、いかに確固としたものとするか、研究上の焦点となる。

4. 研究成果

本研究の成果は、主として(1)ユダヤ学史にかかわるもの、(2)原典資料の概念にかかわるものに大別される。本研究の集大成として発行する予定の論集は、現時点では執筆・修正の途上にあるが、研究成果公開促進費の公募に間に合わせる予定である。

個別的な成果は著書・論文や学会において発表されているが、以下に共同研究を通じて得られた総合的な知見を要約する。

(1) ユダヤ学史研究としての成果

本研究の基礎段階にあたるユダヤ学史の細やかな研究を通じて明らかになったのは、総体としてのユダヤ学の文献的基礎の不確かさである。研究の途上で「原典資料」として参照される定版資料は、実態としては、異なった時代・地域に由来する各種の写本史料の断片を複合したものに過ぎない。そうした「原典資料」を構成する諸要素の間に、連続性を保証するような枠組みは、実のところ外挿的なものである。幾つか、研究の途上で指摘された事例を挙げてみよう。

一般にアガダー研究とされるユダヤ学の分野が確立されたのは、19世紀から20世紀にかけての世紀転換期である。この時期、アガダー集成として編まれたいくつもの文献の中で、現在最も参照されるのは L. Ginzberg, *The Legends of the Jews* (1909) だろう。Ginzberg はここで各種のミドラシュ(説教文学)、ミシュナ、タルムード等の基

礎文献から、説話的な記述を抜粋し、後に文献学的なヴァリエーションを示す詳細な注を付けており、翻訳という手順を付け加えたために原語が不分明になっている点是否定できないが、「原典資料」へのアクセスにあたっての利用価値は極めて高い。

しかし方法論的な観点から考えるのであれば、各種の伝統文献から「アガダー」のみを切り出し、編纂することそれ自体に、いくつかの問題点を指摘することができる。Ginzberg が参照した諸種の伝統文献において、「アガダー」とは律法上の判断にかかわる「ハラハー」に並行し、あるいはその中に織り込まれる形で展開されるものだ。内容面でも、それは説話に限られたものではなく、諸種の道徳訓や諺、生活上のティップスに至るまで、様々な内容を包含している。こうした「アガダー」を説話集として切り出すという営みが、同時代的にもっていたコノテーションは、内容面で重なるところの多い M. J. Bin-Gorion, *Die Sagen der Juden* (1913-1919) と比較によって明らかになる。Bin-Gorion の集成は、文献学的な繊細さという点で Ginzberg のものには及ばず、現在の研究者から参照されることは少ないものの、民俗学的手法を通じてユダヤ民族の民衆的な精神世界を発見・再構築する志向を明確に示しており、その構想は同時代の文化シオニズムのイデオロギーと、大きく共鳴していた。個人としての Ginzberg はユダヤ・ナショナリズムにさほどの共感を示してはいなかったものの、彼のなした「説話集」としてのアガダー集成は、結果として同時代のナショナリストの民俗学的志向に並行して受容されることになる。

別の事例として挙げられるのは、カバラーと呼ばれるユダヤ教の秘教的伝統の再構成の試みである。19世紀のユダヤ史記述において、ユダヤ教からの「逸脱」ないしは「墮落」として描かれることの多かったカバラー文献は、戦間期のシオニスト史学の中で正反対の評価を受けることになった。この際、「硬直した」律法主義と理性主義に対して、カバラーは「ユダヤ教の生命」を体現する神秘主義思想として称揚されるに至るのだが、文献の内実在即して判断されるなら、カバラーとは秘教的な伝承形態を持ちこそすれ、必ずしも「神秘主義」を奉じるものではない。

カバラー文献が他の律法文献から独立した形で再編纂され、律法主義とは別の伝統とみなされることによって、律法主義・哲学・神秘主義を領域横断的に接続していた、多様なニュアンスを持つ中世ユダヤ思想は、寸断された形でしか理解されないようになる。現在進められている、カバラーの基礎文献『ゾハル』の校訂版(Pritzker Edition, 2003-)は、「ユダヤ神秘主義」の精髓の復元というよりは、カバラーが汲み取り、あるいは影響を与えた文献的伝統の多様性を示すものとして理解することができる。『ゾハル』の復元に

あたって必要とされる「原典資料」は、狭義での神秘主義文献を大きく逸脱するものだ。

「説話」や「神秘主義」といった研究領域のなかで言及される諸資料は、学問の営みのなかで、その都度の時代的な要請に従って集積されたものであり、そのまともは、写本の水準においては必ずしも担保されているものではない。まして、ディアスポラ社会のなかで伝承されてきたユダヤの伝統文献は、写本の水準において様々なヴァリエーションを生み出さざるを得なかった。ユダヤ学の研究の基礎にあるのは、こうした多種多様なヴァリエーションを用いつつ、批判的に「原典」を再構成する、という営みであるが、それはしばしば、物理的には存在しない。つまり、写本の水準においては一貫したものとして存在しない「原典」の特徴さえ付加してしまう。研究が基づく「原典」それ自体が研究の所産であるという事実は、我々が普段自明のものとしている研究の基盤それ自体を一旦疑問に付すものだろう。

(2) 「原典資料」の概念

ユダヤ社会の特徴のひとつであるディアスポラという特性は、そこに一貫した歴史の存在を措定しうるか、という問題をつきつける。「ひとつのユダヤ学」という構想がはらんでいるのは、特定の地域や政体、言語に収斂しないユダヤ人の文化をどのようにひとつのものとして捉えられるのか、という問題である。

研究開始当初、我々はユダヤ学自身の所産である「学術校訂版」とは別の「普及版」を基盤として、日本におけるユダヤ学の文献的基礎を固めることができるのではないかと、いう想定を持っていた。しかし、この「普及版」それ自体が、ユダヤ学の「校訂版」に対抗する形で、主として宗教的伝統を奉ずる宗派を中心に、近代になってようやく編まれたものであることも、研究の途上で明らかになってきた。ユダヤ教とキリスト教とを峻別するという点で、ユダヤ教の最も基盤にあるといえるミシュナでさえ、章の構成にせよ、個々の単語の選択にせよ、様々な版を有する。伝統的な価値観を標榜する「普及版」は、ユダヤ学と同様に、そのうちのごく一部を採用し、「原典」としての権威を付与しているに過ぎない。

世紀転換期におけるゲニザ文書群、第二次大戦後の死海文書の発見を経て、「普及版」が奉ずる「伝統」の局所性、時代的な特異性は明瞭になったと言えるだろう。ある特定の時代に伝承された一群のテキストをもって「原典」とみなし、そこに一定の伝統的権威を与える所作は、実のところ、ユダヤ学の勃興と、「普及版」の編纂以前から、已むことなく行われてきたユダヤ人らの振る舞いである。研究の基盤となる「原典資料」の概念を再検討する際に、ディアスポラ・ユダヤ社会に齊一的に存在する一定の文献的伝統を

想定することの困難は、研究を進めるにつけ、如実なものとして実感されるようになった。さまざまな形態のミシュナやタルムードが存在しうるとすれば、一定の超歴史的な規範性を持つ文献的伝統という想定から、我々は脱出しなければならない。

いずれにせよ、ユダヤ人はその場に伝えられた文献を「原典」として参照し、それに解釈を付け加えながら、文献伝承の営みを繰り返していったことは確かである。キリスト教におけるヴルガタ訳や、イスラームにおけるクルアーンのように、確固とした規範性を持つ齊一的なテキストは、そこには存在しない。「原典」とは、一定のテキストではなく、ひとつの範疇であり、その都度、そこに包摂された文献が、伝統的権威を付与されていたことになる。ユダヤ学による「学術校訂版」の編纂の営みそれ自体も、俯瞰的に見るならば、こうした文献伝承の近代的な形態としてとらえることができる。

こうした観点から、「学術校訂版」がこんにちのユダヤ学においてもつ権威性を一定程度相対化することで見えてくるのは、ディアスポラ・ユダヤ社会の局所的な環境下における「原典」の構成を捉え、それを研究の基盤とすることの必要性である。本研究の到達点としてのこの立場に立つ専門論考を集めた論集を公にすべく、現在は編集作業に取り組んでいる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計14件)

市川 裕、ユダヤ正統主義から考える現代の国家・宗教関係、『東京大学 宗教学年報』XXX(2013), 89-101.

Wout van Bekkum and Naoya Katsumata, The Piyyut Lexikon: A morphological Search for Quadri-consonantal Verbs and Nouns in Jewish Liturgical Poetry of Byzantium and the Islamic East, *Frankfurter Judaistische Beitrage* 38(2013), 1-24.

勝又 悦子、偶像を打破するアブラハム：第二神殿時代文学・ラビ・ユダヤ教文献・クルアーンでの解釈の変遷、『一神教学際研究』8(2013), 38-62.

勝又 悦子、タルグム偽ヨナタン(Ps. J.)におけるエリヤ像、『基督教研究』75(2013), 17-38.

市川 裕、ユダヤ賢者における「神の国」の概念、『聖書学論集』46(2014), 195-214.

市川 裕、井筒俊彦とユダヤ思想：哲学者マイモニデスをめぐって、『慶應義塾大学 言語文化研究所紀要』46(2015), 49-69.

市川 裕、神殿供儀から啓示法へ 一神教の歴史におけるラビ・ユダヤ教の意義、『東京大学 宗教学年報』XXXI(2015), 1-19.

市川 裕、タルムードの聖書解釈に込められたユダヤ賢者の実存的関心、『京都ユダヤ思想』4-2(2015), 33-52.

勝又悦子、ユダヤ教における『唯一の神』の意義 『シエマア・イスラエル』を通して、『福音と世界』2014年3月号、21-26.

Wout van Bekkum and Naoya Katsumata, Divine Love and the Salvation of Israel: A New Composition for the Seventh Day of Passover, *Genzei Qedem: Genizah Research Annual* 10(2014), 45-97.

Wout van Bekkum and Shinichi Yamamoto, The Prophet Nathan has come, with Shabbatai Tzevi': An Unknown Praise Poem from the Days of Early Sabbateanism, *Frankfurter Judaistische Beitrage* 39(2015), 69-81.

Shinichi Yamamoto, Book Review: Avi Elqayam, Sabbatean Millenarianism in the Seventeenth Century: A Study of Moshe Abudiente's Fin de los Dias [Hebrew], *Frankfurter Judaistische Beitrage* 39(2015), 125-127.

山本 伸一、新刊紹介：ヨナタン・メール編著『想像のハシディズム：ヨセフ・ペルルによる反ハシディズムの著作』、『セフェル・メガレー・テミリーン』(全3巻へブライ語)、『ユダヤ・イスラエル研究』28(2015)、131.

市川 裕、公的宗教としてのユダヤ教とその現代的変容(韓国語訳)、*Korean Journal of Religious Studies*, 75-1, 37-58.

Koji Osawa, The Interpretations of the Golden Calf Story in Exodus 32 and a New Possibility: A Comparison of Judaism with Syriac Christianity, The 8th CISMOR Conference on Jewish Studies 8(2015), 86-94.

[学会発表](計23件)

市川 裕、「井筒俊彦とユダヤ教 哲学者マイモニデスを中心に」、慶應義塾大学言語文化研究所主催講演会(招待講演)、2013年11月12日、慶應義塾大学。

勝又悦子、「ユダヤ教の人間学 神と人と律法と」、ナザレ研修会第2回講演会(招待講演)、2013年11月2日、横浜アンデレ教会。

Naoya Katsumata, 'The Research History of Samuel the Third's Poetry', The Tenth Congress of the European Association for Jewish Studies, July 23, 2014, Paris, Ecole Normale Superieure.

市川 裕、「祭司的ユダヤ教からラビ・ユダヤ教へ」、日本宗教学会第73回学術大会、2014年9月13日、同志社大学。

市川 裕、「公的宗教としてのユダヤ教とその現代的変容」、韓国宗教学会2014年度秋季大会(招待講演)、2014年11月15日、

ソウル、東国大学

勝又悦子、「ユダヤ教における『自由』」、同志社大学進学研究会公開講演会(招待講演)、2014年10月22日、同志社大学。

Shinichi Yamamoto, 'Anti-Sabbatean Documents and Their Influence on Histiography of Sabbateanism', Association of Jewish Studies 46th Annual Conference, December 15, 2014, Baltimore, Hilton Hotel Baltimore.

山本 伸一、「シャブタイ派文学におけるメシアの神格化」、日本ユダヤ学会第11回学術大会、2014年10月18日、早稲田大学。

Shinichi Yamamoto, 'Analysis of Turban and Tefillin in Sabbatean Texts', The Tenth Congress of the European Association for Jewish Studies, July 22, 2014, Paris, Ecole Normale Superieure.

Shinichi Yamamoto, 'Pseudohistoriography and Religious Studies in the Early Twentieth Century', The 6th Israeli Conference for the Study of Contemporary Religion and Spirituality, April 23, 2014, Tel Aviv, Tel Aviv University.

Shinichi Yamamoto, 'Introduction to Kabbalah: Marginality and Creativity', Special Lecture of Groningen University (招待講演), September 25, 2014, Groningen, Groningen University.

Schinich Yamamoto, 'A Comparative Analysis of Kabbalistic and Isma'ili World of Cycles', The 8th Annual Conference on Jewish Studies, Center for Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions, March 1, 2015, Kyoto, Doshisha University.

山本 伸一、「シャブタイ派の「異端」をめぐるユダヤ人共同体の反応と対異教徒関係」、「ユダヤ自治」再考」第2回公開ワークショップ、2014年10月19日、大阪経済法科大学東京麻布台セミナーハウス。

山本 伸一、「カバラ 文学の中の旅する神秘家たち」、立教大学文学部史学科主催公開講演会、2014年12月17日、立教大学。

Koji Osawa, 'The Interpretations of the Golden Calf Episode in the Book of Exodus Ch. 32: A Comparative Analysis of Judaism and Christianity', The Tenth Congress of the European Association for Jewish Studies, July 21, 2014, Paris, Ecole Normale Superieure.

Koji Osawa, 'The Interpretations of the Golden Calf Story in Exodus 32: Exploring Jewish Christian Relationships in Late Antiquity', The 8th Annual Conference on Jewish Studies, Center for Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions, March 1, 2015,

Kyoto, Doshisha University.

Hiroshi Ichiakwa, 'From Sacrifice to Divine Law: The formation of the Halakhic Religion of Jews under the Roman Empire', XXI World Congress of International Association for History of Religion, August 28, 2015, Erfurt, Erfurt University.

市川 裕, 「一神教の歴史におけるユダヤ啓示法の意義」, 第74回日本宗教学会学術大会, 2015年9月6日, 創価大学.

市川 裕, 「日本の世界史教科書におけるユダヤ人」, 早稲田大学史学会公開シンポジウム「世界史の中のユダヤ人」, 2015年10月4日, 早稲田大学.

市川 裕, 「タルムードと日本文化」, 同志社大学一神教学際センター主催 CISMOR 公開講演, 2015年11月7日, 同志社大学.

① 大澤 耕史, 「シリア教父に見る『ユダヤ性』 その境界と自己認識」, 京都ユダヤ思想学会, 2015年6月20日, 同志社大学.

② 大澤 耕史, 「モーセ象から見る古代ユダヤ教とシリア・キリスト教」, 第74回日本宗教学会学術大会, 2015年9月5日, 創価大学.

③ 大澤 耕史, 「出エジプト記32章金の子牛像事件再考 その責任と罪について」, 日本ユダヤ学会第12回学術大会, 2015年10月31日, 早稲田大学.

〔図書〕(計7件)

勝又 直也・勝又 悦子編, 京都大学勝又研究室, 『ユダヤ文献原典研究』1, 2014, 128頁.

Joseph Yahalom and Naoya Katsumata, *The Yotserot of Samuel the Third. A Leading Figure in Jerusalem of the 10th Century, Volume One: Introduction; Yotserot for Genesis, Exodus and Leviticus, Volume Two: Yotserot for Numbers, Deuteronomy and Festivals; Indices*, Jerusalem, Yad Izhak Ben-Zvi, 2014, 1139 pp.

市川 裕(編著), 山本 伸一(寄稿), 河出書房新社, 『図説 ユダヤ教の歴史』, 2015, 132頁.

市川 裕, ドメス出版, 南直人編 『職の文化フォーラム 32 宗教と食』, 282頁(担当68-89頁).

市川 裕(編), 勝又悦子(寄稿), 聖公会出版, 『世界の宗教といかに向い合うか 月本昭男先生退職記念献呈論集第1巻』, 2014, 325頁.

Avigdor Shinan (ed.), Etsuko Katsumata, Yedioth Ahronoth Books and Chemed Books, *Thousands of Years – A Collection of Articles and Reactions from the Students*, 2014, 392 (359-360)

Yoachim Yeshaya and Elisabeth Hollender (eds.), Wout van Bekkum and

Naoya Katsumata, Brill Academic Publisher, *Exegesis and Petry in Medieval Karaite and Rabbanite Texts*, 2016.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

勝又 直也 (KATSUMATA, Naoya)
京都大学・大学院人間・環境学研究科
准教授
研究者番号: 10378820

(2) 研究分担者

市川 裕 (ICHIKAWA, Hiroshi)
東京大学・大学院人文社会系研究科 教授
研究者番号: 20223084

勝又 悦子 (KATSUMATA, Etsuko)
同志社大学・神学部 准教授
研究者番号: 60399045

山本 伸一 (YAMAMOTO, Shinichi)
京都大学・大学院人間・環境学研究科
研究員
研究者番号: 00726804
(平成26年度のみ)

大澤 耕史 (OSAWA, Koji)
東京大学・大学院人文社会系研究科
研究員
研究者番号: 40730891
(平成26年度以降)

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

向井 直己 (MUKAI, Naoki)
京都大学・大学院人間・環境学研究科
特定研究員
研究者番号: 00725400